

ひばりのおじさん

小川未明

青空文庫

町まちの中で、かごからひばりを出だして、みんなに見みせながら、あめを売うる男おとこがありました。その男おとこを見ると、あそんでいる子供こどもたちは、

「ひばりのおじさんだ。」と、いって、そばへよつてきました。

あき地ちになつている、すこしのひろばへ、かたから、あめの箱はこと、下さげているかごを下おろしました。

「さあ、お坊ぼつちゃんも、おじようちゃんも、あめを買かつてください。ひばりをはなして見みせますよ。」と、男おとこは、こしをおろしながら、子供こどもたちの顔かおをながめました。だいぶあめが売うれると、男おとこは、かごのふたをあけて、

「さあ、とべよ。」と、いわぬばかりに、片手かたてを上げ、後あとさがりをしました。

ひばりは、やがて、パイチク、パイチク、なきながら、高たかく、高たかく、空そらへ上あがりました。そして、このまま、どこへかとんでいってしまいうに、見みえなくなつたが、そのうちおじさんが、パイ、パイ、パイ、笛ふえを鳴ならすと、けんとうを、あやまらずに、えんとつや、たてもこの間あいだを分わけて、すぐ近ちかくへ下おりて、またかごの中なかへ入はいってしまいました。

おじさんは笑わらいながら、「私わたしのいのちより、大だいじ事じにしていますよ。」と、いつもいうの

でした。

ある日、おじさんは、いつもの場所へきて、年ちゃんや、義ちゃんや、とめ子さんのいる前で、ひばりをかごからはなしたのでした。

ピーチク、ピーチク、となきながら、いつものように、ひばりは、空へ高く、高く、上がっていききました。

このとき、人間の耳には入らなかつたけれど、はるかかなたの空で、ピーチク、ピーチクとなき声だったのであります。

「はてな、どこかしらん。」と、ひばりは、思いました。それで、いつそ声をはり上げたけれど、むこうの声は、すこしも近よるようすがなかつたのです。

「いつてみよう。」と、ひばりは、その声のする方へ、とんでいきました。青い、青い、野原の上で、二羽のひばりが、たのしそうに、とんでいるのです。

「やっぱり、野原はいいですね。」と、かごのひばりが、いいました。

「町も、にぎやかで、いいでしょうね。」

「私が、よんだとき、なぜこなかつたのですか。」

「かわいい子供が、あの黄色くなりかけた麦のはたけにいますので、私たちは、心配で、

どこへもいくことができないのですよ。」と、野のひばりが、こたえました。

日がくれかかると、野のひばりは、麦ばたけの巣の中へ帰りました。そこには、かわいい子ひばりが、お母さんや、お父さんの帰るのを待っていました。ひとり取りのこされたかごのひばりは、

「ああ、やはり私は、かごの中へかえろう。」と、町の方へとんできました。おじさんは、ひばりがいなくなつたので、気を、もんでいました。

そのとき、パイチク、パイチク、ひばりの声がしました。おじさんは、よろこんで、パイ、パイ、笛をふきました。ひばりは、だんだん地上へちかづくど、じつと自分を見上げておじさんの顔と、年ちゃんや、義ちゃん、とめ子さんたちのかわいらしい顔を見ただけであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「せうがく三年生」

1938（昭和13）年6月号

初出：「せうがく三年生」

1938（昭和13）年6月号

※初出時の表題は「雲雀の小父さん」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひばりのおじさん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>